

---

# The City Of Night

白波の使徒

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

The City Of Night

### 【Zコード】

Z6074E

### 【作者名】

白波の使徒

### 【あらすじ】

『カミサマ』 それは未来を予知し人々を統制する大規模な人工知能集積体。『巫女』 それはカミサマの声を聞き人々へ伝える唯一無二の女性。カミサマと巫女は人々をコントロールし、諍いがなく平穏な『理想郷』へ人々を導こうとしていた。人々はそれにおとなしく従うだけのアヤツリ人形と化し、『神様の思召』は絶対とされた。例えそれが、いかなる犠牲を伴うものであれども

その日は、雨だった。

雨脚は強く、空を覆いつくした黒い雲はどうやら今日明田に止む雨ではなさそうであることを示唆してくれていた。

雨が降りしきるこの草原の中、少年と、少女、いずれも十をよつやく越したころであろう兄妹がいた少年はその体に不釣合にな大剣を手に、妹をかばうようにして立っていた。

「くそっ……。」

殺氣だつた大勢の人々に囲まれて。

「坊主、妹さんをこすけらに渡せ」

一人の男がうんざりしたように言った。

「いやだ!!」

「諦める、これもカミサマの思ひ出しだ」

少年の形相が一変し吼えるように彼は叫んだ。

「カミサマがなんだ!!今まで、カミサマが僕らに向をしてくれたつていうんだ!?両親だって、カミサマに殺され……そりに妹も奪うのか!」

「なあ坊主。こんな決まり、知ってるか?」

そう言うと、男は拳銃を取り出した。少年の表情が凍りつく。

「カミサマの思ひ出しだに背くやつは……」

男は拳銃の照準を少年にあわせた。

それでもなお、少年はおびえる妹をかばっていた。

「死刑だつてことを」

男が、躊躇なくトリガーを引いた。

銃口から発射された鉛の玉が、少年の細い体を容赦なく貫通する。

「うつ……」

「お兄ちゃん!!」

妹が、撃たれた兄の下へ駆け寄った。妹の華奢な腕を、少年がいと

おしゃうになでる。

「ミク……。」

少年は剣を支えに立ち上がり、妹を促した。

「逃げる」

「いやだよ……お兄ちゃん……。」

妹は泣き崩れた。

「逃げる……お前だけは……。」

兄は言った。

「お前だけは失わないから……。」

少年は群集に突撃を敢行し。

「アホが」

男が、人々が、少年に発砲した。  
それが当然であるかのように。

断末魔の叫びは聞こえず。

その少年は、『削除』された。

『……』

「まあ、巫女様、」ちらりく

「お兄ちゃん……。」

「兄は、カミサマに逆らい『削除』されました。彼が悪いのです。」

「違う……」

「チツ、仕方ない……。おい、巫女様をお運びしろ。丁寧にな」  
男が、周りの人々に命令した。一人がおびえる少女の口元に布を当てた。

「あ……」

蚊の鳴くような悲鳴を残して、少女は意識を喪失した。

誰からともなく少女は、割れ物を扱うかのように、丁寧にいすこかへ運ばれていった。

野原に、少年を置き去りにして。

その日は、雨だった。

.....

「.....！」

暗い。何も見えないその光景を目の当たりにしてから、初めて彼  
神坂龍也は事実を理解した。

「夢、か」

随分といやな夢を見たものだ。.....いや、こんなのは今までに何十、  
何百回と見てきた。そしてその度に激しい動悸と、寝汗にまみれた  
体で起きるのだ。

今回も例外じゃなく、俺の体はしつかりと寝汗にまみれ、激しい動  
悸がする。彼が殊更に眠ることを嫌うのはこのためだ。

チ、と軽い舌打ちをして、少年は起き上がった。

時計をちらと見て、大きくもない手でそれを鷲&amp;#256  
81；みにすると荒々しくカバンに放り投げた。

いつもは雑然としている部屋は、綺麗に むしろ何もなく、床の上  
においてあつたカバンも彼が背負ってしまったため、ここにあるの  
は彼が布団にしていたぼろぼろの布切れだけだった。

そう。それは もう一度ここには帰つてこないということを暗示  
している気もある。

今日からこの部屋の住人ではなくなった彼は手早く着替えを済ませ  
ると、いとおしげな眼差しで部屋を見渡し、大剣を手に取つた。  
彼はもう既にこの部屋にはいなかつた。

.....

『カミサマ』 それは未来を予知し人々を統制する大規模な人工知  
能集積体。

『巫女』 それはカミサマの声を聞き人々へ伝える唯一無二の女性。  
カミサマと巫女は人々をコントロールし、諍いがなく平穏な『理想  
郷』へ人々を導こうとしていた。

人々はそれにおとなしく従うだけのアヤツリ人形と化し、『神様の思し召し』は絶対とされた。

例えそれが、いかなる犠牲を伴つものであろうとも

.....

「人間はおろかだ」

そんな声が、機械の密集した部屋に響いた。

ただ、回るファンの音のみが聞こえるこの部屋に、白い服を身にまとい、その少女は立っていた。

「だから、私がカミサマの声を聞き、人間たちを理想郷へと導く」

その目には、何も映つていなかつた。

「もうすぐです……もうすぐ」

彼女はそう吐き出すように言つと、闇に姿を消した。

.....

ウイン カシャン。

ゲートが閉じる音がする。立ち入り禁止地区、A区域。そこには力ミサマのいる ある、「ホコラ」のある場所だ。とても広大で、地平線が見える。

名前とのおり、ここは立ち入り禁止で、重度を示すレベルはA。入っただけ死刑は免れず、カードキーがなければ入れない。

そうして、少年の手から、カードキーが投げ捨てられた。

こんなもの、もういらないものだ。

「さて」

番兵がカードキーを持っていたのはいいものの、番兵を殺して 壊してしまつたのだから、そろそろ緊急出動命令が下つてゐるはずだ。侵入者を排除する「機兵隊 地」が自分の周りを取り囲むのに二十秒かかるまい。

地平線が機兵隊で埋め尽くされ、空には「機兵隊 空」が飛んでこちらに向かっている。

「しかたない」

少年は吐き捨て、大剣を抜く。かつては自分と同じくらいの大きさであったその刀身であつたが、今となつては、軽々と操れる。

「フン」

刀が、龍也の手から放たれる。放たれた大剣は回転運動と加速度運動を同時にしつつ、そして、機兵隊 空 の大部分を蹴散らした。刀は弧を描くように飛び、少年の手に戻る。

「ゴォン」と爆発音が遠くで響き、その煙を切つて矢が放たれた。

「む」

龍也は横に飛び、矢をよける。それを口火に、レーザーが次々と放たれる。

「チ、飛び道具とは卑怯な……」

少年はレーザーの雨の中、機兵隊に突進した。

.....

少女は、侵入者がいるとの報告を聞き、コンピューターの画面越しに彼の姿を見ていた。

「おろかな」

蔑むような声が反響する。

彼女は冷酷な顔つきで、画面をタッチし、画面が一斉に切り替わったのを見て、満足げに晒つた。

「削除セヨ」

そんな言葉が、そこには表示されていた。

品が散乱し、ただ、一人の少年が大きく肩を上下させていた。

龍也は大剣を鞘に納め、はるか遠くの塔を睨みつけた。

「……待つていろよ……ミク」

そういうなり、彼は駆け出した。

塔をめがけ、全速疾走。

その疾走は、ものの数分で塔と少年の間の距離をゼロにした。

「はあ……はあ……」

ただ、龍也の息のみが聞こえる。この世界は静寂に包まれていた。龍也は、長い階段を上り始めた。

大規模な人工知能の集積体と、運命に飲まれた哀れな少女がそこにいる。

……

少年が、大きな扉を開けた。

暗闇の世界が、目前に広がる。少年は中へと入り。

そして、光が彼の体を一閃した。

斬、と。

「う……」

不可避の一撃を、彼は真っ向から受けた。

ボト、と彼の腕が床に落ちた。否、落ちたのは腕の外張りだけであった。

内側の、機械そのものの腕が、むき出しになつた。

「十年間も、カミサマをうらみ続けたか」

そんな声が、部屋の奥から聞こえた。

「機械のような、人間のような、中途半端な体になつてまで」

彼は、少女の顔をしかと見据えた。その顔は、十年前とはだいぶ違つていた。

「己が運命に抗うか！神坂龍也！」

「恨んでなんか……いないさ」

少年は、むしろ優しく否定した。

「ただ……俺は、妹の笑顔を取り戻したいだけだ！」

少年は、刀を抜いた。

「家へ帰るぞ！！」

少年の声は震えていた。その田に宿っていたのは。

「ミク！――」

絶望と、それを圧倒的に上回る決意の色であった。

## (後書き)

衝動書きにつき、ストーリー性を著しく欠如させてしまっていますが、これも自分の計画性のなさがなせる業なので。

これは教科書のある小説から思いついたものです。その小説では、民はみんな笑顔の仮面をつけるよう強要されます。それにより争いは途絶えた現代、それに疑問を感じる少年を描いた短編モノですが、さて、それによって得た安寧は、果たして本物の安寧なのでしょうか？本作も同じようなことを問い合わせみようと試みていたり、いなかつたり、実はフラッシュの影響もあつたりとなんともアレなものになってしまいました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6074e/>

---

The City Of Night

2011年1月19日21時49分発行